

I. はじめに

蔵王町曲竹にある鍛冶沢遺跡は、蔵王東麓の青麻山（標高799m）から続くなだらかな丘陵上に営まれています。明治時代から中央の学界に知られ、完全な土偶が出土したことで有名な遺跡です。

発掘調査では、遺跡にある巨石の間からは、約2,300年前の弥生時代前期の再葬墓が発見されました。再葬墓とは、遺体をいったん埋葬し、後に遺骨を回収して土器に納めた墓のことです。

ここでは、鍛冶沢遺跡の成り立ちから再葬墓が成立する弥生時代までを紹介します。あわせて、鍛冶沢遺跡に関する学史・教育史について振り返ります。

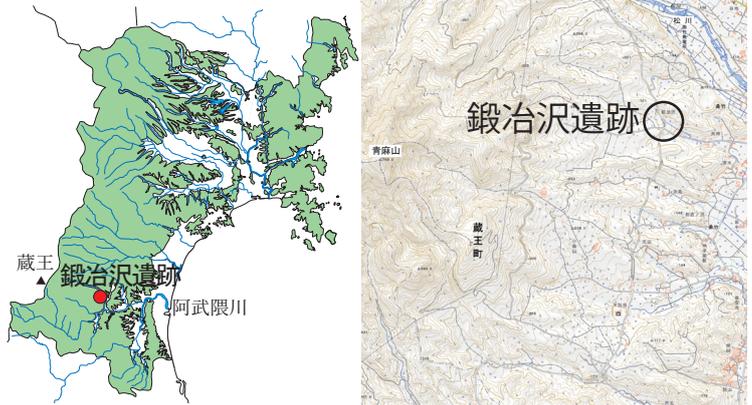


図1 蔵王町鍛冶沢遺跡の位置

II. 青麻山と遺跡

蔵王火山地の中で最も東側の青麻山は約40万年前の成層火山です。その秀麗な山容から、古代には延喜式内社の刈田嶺神社の神体山として信仰の対象となっています。なだらかな裾野は火砕流と山体崩壊による岩層なだれによって形成され、鍛冶沢遺跡はじめ多くの遺跡が分布しています。

III. 遺跡の始まり

鍛冶沢遺跡の始まりは、土器に付着する炭化物の年代測定によっておおよそ9,000年前にさかのぼることが明らかになりました。氷河時代の最後の寒冷期を過ぎ、関東地方では貝塚が作られ始め、東北地方でも針葉樹林から落葉広葉樹林に大きく変化しました。

出土土器は、青森県八戸市日計遺跡出土土器を標準とする早期前葉の日計式土器です。器面には押型文や縄文が施されています。押型文は切断した笹竹などに彫刻を施し、土器に転がして文様をつけたものです。

IV. 遺跡の構成

2007・2008（平成19・20）年の発掘調査では、縄文時代晩期中葉（約2,700～2,600年前）ころの掘立柱建物跡群が発見されました。中央には「広場」が設けられ、晩期後葉から土壌墓や土器埋設遺構、弥生時代には再葬墓が確認され、墓域として機能しました。



図2 青麻山と鍛冶沢遺跡調査区（東から）

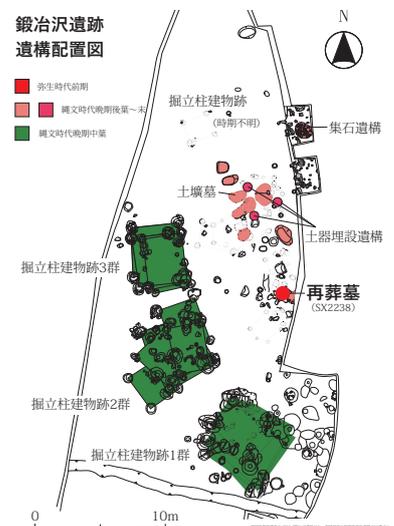


図3 遺構配置図

V. 巨石と再葬墓

建物群に囲まれた地区のほぼ中央の巨石と巨石の間からは、弥生時代前期（約2,300年前）の壺棺を用いた再葬墓（SX2238）が発見されました。L字形の土壇には、壺棺3個が納められ、土壇の埋め戻しの土には、骨片と炭が少量、混じていました。

大型の壺3点のうち1点には、全面赤彩の高坏が蓋として転用されています。壺の中からは骨は検出されませんが、他の遺跡の例から再葬墓と考えられます。また、石鏃が1点入っていた壺があり、副葬品とみられます。



図4 巨石と再葬墓

VI. 動物形注口土器

イノシシの幼獣（ウリボウ）を模した注口土器です。正面三角形の顔面には、大きく突き出した鼻と、大きな目が表現され、尾部に注口が作り出されています。

側面には曲線状の変形工字文が配され、竹串状工具による刺突文が多用されています。再葬墓が営まれた弥生時代前期の優品です。



図5 動物形注口土器

VII. 鍛冶沢遺跡のむかしといま

1904（明治37）年に東京高等師範学校の佐藤傳蔵（1870-1928）が『東京人類学会雑誌』第233号に「蔵王火山附近の石器時代の遺跡（未定稿）」を発表したのが、鍛冶沢遺跡の初出です。地質学者の佐藤は遺跡の存続時期と青麻山の火山活動時期について論じています。

1932（昭和7）年には片倉信光（1909-1985）が、鍛冶沢遺跡の遮光器土偶を『上代文化』（國學院大學上代文化研究会）第8号に資料紹介しました。片倉は東京郷土資料陳列館（現江戸東京博物館）学芸員、齋藤報恩会博物館学芸員を経て、戦中には奥州白石郷土工芸研究所に活躍の場を移しました。片倉は戦後新設された「社会科」の教育実践を模索する教師たちと親交を深め、1955（昭和30）年には白石中学校で「ふえるの神さま」の制作が始まっています。こうした作業学習は広く注目され、1962（昭和37）年には、文部省主催の東日本特殊教育指導者講座が白石中学校で開かれ、見学者であふれました。1965～66（昭和40～41）年度には、県内最初の中学校特殊学級研究指定校となり、このころ県内中学校特殊学級が急増するなかで、「ふえるの神さま」は先進的な役割を果たしました。やがて1991（平成3）年ごろには制作されなくなり、かつて指導にあたった元教諭が白石市福祉作業所やまぶき園で復活させています。



図6 遮光器土偶（複製）と「ふえるの神さま」

左：実物は仙台市博物館所蔵。縄文時代晩期中葉大洞C2式。細い目の表現と角状突起を特徴とし、全面赤彩の痕跡を残しています。右：「ふえるの神さま」焼け縮みによって、一まわり小さくなっています。

2007・2008（平成19・20）年の県教育委員会による発掘調査では、弥生時代前期の再葬墓をはじめ、鍛冶沢遺跡全体の様相の一端が明らかとなりました。2012（平成24）年には鍛冶沢遺跡の遮光器土偶は県の有形文化財に指定されています。

2018（平成30）年には蔵王町教育委員会によって遺跡に案内板が設置されており、興味のある方はぜひ現地を訪ねてみてください。

〔謝辞〕

本展を開催するにあたり、白石市立白石中学校、白石市福祉作業所やまぶき園、白石市図書館、鈴木雅氏（蔵王町教育委員会）、青野友哉氏（東北芸術工科大学）、菅原哲文氏（山形県埋蔵文化財センター）、金子昭彦氏（岩手県立博物館）、杉野森淳子氏（青森県立郷土館）、松井かおる氏（江戸東京博物館）の協力を得ました。記して、謝意を申し述べます。